

「永遠の命の言葉」

2024年11月01日

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも去ろうとするのか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、私たちは誰のところへ行きましょう。永遠の命の言葉を持っておられるのは、あなたです。あなたこそ神の聖者であると、私たちは信じ、また知っています。」すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、私が選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。(ヨハネ 6:66～71)

主イエスは、「私は天から降って来た命のパンである」、「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる」と言われた。これを聞いた弟子たちの多くの者が、「これはひどい話だ。こんなことを誰が聞いていられようか」とつぶやいた。弟子たちのつぶやきを聞いた主イエスは、「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子が元いた所に上るのを見たら、どうなるのか」と言われた。主イエスの言葉は理解できない。「元いた所に上る」という言葉も、弟子たちには理解不能であろう。主イエスは「命を与えるのは霊である。肉は何の役にも立たない。私があなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちがいる」と続けられた。弟子たちが求めるのは空腹を満たしてくれるパンであり、主イエスが差し出そうとされたのは神の命に与る霊的パンで、両者の隔たりは結び合うことはない。主イエスは人々の不信仰はもとより、ご自分を裏切る者が誰であるかも知っておられた。そして、「こういうわけで、私はあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれも私のもとに来ることはできない』と言ったのだ」と言われた。神が主イエスを信じる者を決めておられるという表現が「予定説」を生み出した。しかし、信仰は神が決める宿命論とは違い、主イエスに対する人格的な応答で、そこに神との喜ばしい出会いがあるのである。

主イエスの真実と愛に魅せられ従って来た多くの弟子たちは、霊の言葉で語られる主イエスを理解できず、離れ去っていった。そこで主イエスは十二人の弟子たちに、「あなたがたも去ろうとするのか」と問われた。するとペトロが真っ先に、「主よ、私たちは誰のところへ行きましょう。永遠の命の言葉を持っておられるのは、あなたです。あなたこそ神の聖者であると、私たちは信じ、また知っています」と答えた。

共観福音書では、カイザリアで主イエスが「あなたがたは私を何者だと言うのか」とお尋ねになった時、ペトロが「あなたはメシアです(マルコ 8:29d)」と「キリスト告白」をしている。ヨハネ福音書では、主イエスの霊的な言葉につまずいた者たちは立ち去ったが、ペトロは「あなたは永遠の命の言葉を持っておられる神の聖者である」と告白をした。「永遠の命の言葉を持っておられる神の聖者」という言葉が、ヨハネ福音書におけるペトロの「キリスト告白」である。この「キリスト告白」を受けて、主イエスは、「あなたがた十二人は、私が選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ」と言われた。主イエスが十二人を選んだ、選ばれたうちの一人でありながら、イスカリオテのユダは裏切りに走った。ペトロの「キリスト告白」の後、人々の主イエスへの不信は広がり、主イエスは孤独の中を、十字架に向かう苦難の道を歩むことになっていく。主イエスの苦難と死に自分の救いを見出すところに真の「キリスト告白」がある。